



四十二回生

だより

昭和十九年卒業しました私どもは戦争のさなかに学生生活を終始し、以来十年近く敗戦と戦後の混乱した時代の中に明け暮れましてので一度のクラス会も持てないで、今日まで打過ごしてしまいました。然し若い日の欲びも苦しみも共にした「目的の友」への郷愁は限りなく、一度みんなが一堂に会し得たらという願いは誰もが感じ合っている事の様でした。たまたま同県に住み合せた私共二人がせめても紙上でクラス会と呼びかけましたところ、多くの共感を得て、「私たちの集い」なる小冊子を発行する事が出来ました。各々の消息を集めたこの一冊が十年の懸隔を吹き飛ばし、皆の心を温めたもの様でした。

消息の集まつたのは留學生、当時外地在住者及び住所不明の十数名を除いた約四十名でした。未婚者は五名で、内四名は(十%)引

続き仕事と取り組んでいる人でした。(教職一、労働教育一、社会教育一、児童福祉一)あとは既婚者で、家庭と仕事を両立させているのは、一人だけ(二%)みんな二人、三人の子供を持つ家庭婦人で占められています。(八五%)子供達は幼児(小学二年生から、乳幼児まで)が殆どで育児にも相当手がかかる為、家庭生活に忙殺されている人が多様です。子供が成長し、主人の仕事に積極的に協力している人や、社会的に働きかけている人は二、三見られるだけです。

さて、私どものクラスの大部分はこの様に忙がしい家庭の主婦ですが、それらの子供たちを立派に育て上げた頃にはやがて各各経済的にも安定して、社会的に働き出す余裕も出て来るでしょう。誰も心の底には自由で、そして、三類(社会福祉科前身)で培われた

ものは大事に育みつづけている様です。大抵の人は結婚以前に、社会に出て仕事を持った経験者であり、それに妻や母としての経験が加われば、やがて社会に出て良いお仕事の出来る人も少なからず出ようかと想像されます。

尚社会福祉科の若い有能な人々の先輩たるには、お恥しい私ども乍ら、引続き仕事に専念している人はもとより家庭婦人にも可能な協力事項があれば、大いに御利用御教示が願いたいものと、これはおそらく皆の気持である事を察察してお願ひしておきます。

ともかくも久々に得たクラスの人々との心の交流は生活に新しい力と希望を与えられた様です。この計画は世話役を次々とバトンタッチして年々やりましようと言う事で次回の世話役も決定していきます。次の機会には消息の解らない人々とも連絡のとれる様努力し、お互いが何かの形で助け合いたいものであると願つて居ります。又今回序論であつた各々の物語も回を重ねる毎にコクのあるものになり、得難い心の糧にもなつて行く事であること楽しみにして居ります。

リーダー松本先生のクラス

堀内 公子

(旧姓柴田)

小林 和子

(旧姓飯田)